

## 新スマートシティ論<sup>(15)</sup>

今回はスマートシティに関連する取り組みとして、ぜひ知っておいてほしい「スポーツ版スマートシティ」ともいえる動きを紹介したい。

スポーツを生かした街づくりの中核施設として「スマート・ベニュー」と呼ぶ多機能複合型のスポーツ施設が注目されている。日本政策投資銀行が提唱する概念で、スポーツの強力な集客力に着目し、商業施設なども備えたスポーツ施設を郊外ではなく街の中に整備する。周辺エリアも含めて運営し、スポーツ施設の収益向上と一体的に地域の活性化を図る。

こうした取り組みが国内外で進んでいる。好例が長崎スタジアムシティ構想（長崎市）だ。駅周辺再開発計画とともにスタジアムを建設し、一帯を商業、ホテル、オフィスなどを回遊できるように開発する。また、吹田サッカースタジアム（大阪府吹田市）は隣接の複合施設「EXPOCITY」、関西電力と共同で「万博スマートコミュニティ」と称した地域社会と調和した街づくりを手掛ける。

スポーツ施設のデジタル化では、ノエビアスタジアム神戸（神戸市）でJリーグ・ヴィッセル神

戸のホームゲームで飲食物販を完全キャッシュレス化している。

実際にスポーツを核にしたスマートシティに取り組む動きも出てきた。茨城県鹿嶋市とメルカリ、鹿島アントラーズは2月、「スポーツ×テクノロジー」をテーマにスマートシティ事業を共同展開する協定を結んだ。情報通信技術などを活用して地域の課題の解決をしようとしている。

今後、スポーツを生かしたスマートシティによる効果を広げるには、施設と周辺地域の情報連携がポイントとなる。例えば、駅に降りたファンをセンサーで検知し、電子チケットを持つファンはスポーツ施設へ、持たないファンはパブリックビューイング会場へ誘導する。ゲーム中の施設での購買情報を蓄積・分析し、周辺飲食店をお薦めし、その際、異なるチームを応援するファンが鉢合わせしないよう考慮するなどだ。

地域一体となった情報連携でスポーツ観戦を目的に訪れた来街者の行動変容を促し、消費の拡大を図るのである。さらにスポーツ選手のデータや地域住民の健康データなどを活用したスポーツ用品やサプリメントの開発といった新たな産業創出も考えられる。スポーツを核としたスマートシティは大きな可能性を秘めている。

# 競技場を生かす街づくり

スポーツ施設の違い

従来型	未来型 「スマート・ベニュー」
単機能型施設	多機能型施設
行政の主導	民間活力の導入
郊外に立地	街中に立地
低収益性	収益性の改善
施設単独で運営	周辺エリアと一体運営



この・まさひろ 建設コンサルタント会社や大手コンサルティング会社などを経て現職。

都市計画の知見をベースにインフラやスポーツ、防災、農業などに関する国や自治体の計画策定支援や地域活性化事業などに従事。